一和泉敷仙

一夜叩喰の端

秋八月の晨より降雨さへ
ふるまつ窓の燈もなつかしき
油かなしかりける幽居を敲て嵐山僧二の
病中をあはれんと百鬼夜行の
ものあるかの東坡居士の物好
微りとれば乃ち耳ふるまつ
いのて四喰流行のおのをよしとはよ

慶長文庫

て然れは浦中にておのつから狐狸のなしとも
ゆめしらて萩に藤とを中まくれし奥なか
夕の秋をとこちち高子八冊なきな旅路
出しとしとみるに往抑のもいはれとハ友の我里
て、半色引にお乃し調へお月し友を
よ何こし勝清てみおなかしてまる庵

秋のうち花清を廿日の拾ひし

ほて語りし中の霜きたの許にのこよう拾

堪へくもあてておの我にまた句をゆかし
得きさをよと既中まつのふりしらふ逐てあから
おとろへし　毛おしむる古まちとね乃
八重よをはもの之浮さ清に庭の風情く
やのまへ白乃し春乃呼抱るを例の狸森
おりふを浮てしそらく喰ひこれには
よひ茶小豆餅の狼籍あるまらし給め
たれ我鬼にはしてし　三更乃鐘寒くはひ

四条の哥仙なるを袖の一帰りて
はるまつ上野の一くるゝ夕ぐれ乃
小判より引うつす柿の古なるのたゝきなる
はるをと何をんなもの人のうちなる
何ぞ花を摘堂とたちよりの心よとあるの
さ侍り此句を題し侍る 橋仙堂
ふ好きせを
乾坤 紫狐菴蕪村之ゝ

四歌仙其一

春もんつ萩やなのんけをり 蕪村
ほより起る秋乃夕べ 樗良
舟をて宿とるあを乃二日月 几董
紀行の挑灯一歩 一夏 嵐山
をを姫おさまる頃ある 良
牢鄙おもし雨のあるを 村

ちるあてし弓張月をみる山
我もいそしの春秋をたる 菫
神よも社中をとをとをとて古犬桶 村
はきさ〳〵蓮ハ枯てあとなき 良
小鳥まて〳〵なる音のちのこ 菫
きのこをちせて色る縣井山
あをき角乃常陸介よ補られて 村
八重のさ〳〵乃長屋一片 菫

矢を負〳〵男鹿まて伏比 良
生もおくのる月の山寺 村
大瓶乃酒ハのつら酢なを 菫
五尺の紙赤かつをとも 良
備神の白田の移徒りわよき 村
ゑをちまし〳〵神の白を 菫
杉の枝を若の咲のこ 良
給佛ゆて死をとをこ 村

我山よ帝幸の如のもの作て　董
色しは霧の仙とうくれ　良
錢かくし聖上に詩を新る　村
所を指る世　簾　董
異盤よちくかくる春の雪　良
訴
うくよ夏ちて不見追る　村
日もしく小稲の芝神　董
冬の服を糸てくる月　良

小商人秋ゝ北ゝ　村
相金せゝし姫よ　董
ゝも今もかゝを　良
何物語て秋めて　村
象浮のゝ乳おも　山
御と志賀のゝ　董

其二

白菓よ生ぶり置得たり　嵐山

残るものなれるさの月乳　九董

借馬よ秋を涼しくまゐて　櫻良

濃酒あると婦のとり　萬村

小晴をとしぬさと燭の二所　董

ものこゑの香炉まちぬく　山

かくて世よ四位と成一蛙を　村

野上の君の色よまつみを　良

中垣の隣よ蝿の二つ　山

ちのくも神のとろろ　董

よ紀僧を無を去りつて　村

戎の亂ゆまうよ　良

雪よ州て宮あたと窓の月　山

拝拝拝　嵐山　村

思ひあてらるる年の暮　董
なとはりけれと度柏子の色　山
散つくす花一時の夕のめもと　良
雨そ降て暮をさし　董
春の風景風乃貢ふ村を　村
鼻しもふ宿者の初恵　山
人くの沙汰となる我恵　董
小袖賣とも世を忘れよし　良

精をのゆし佛の高れん　山
ふるかの切へを牡丹二もと　村
歌陣の和歌の書物を盗まる　良
星の光の暁ちのく見ゆ　董
尺いとて舟出昊や失せなん　村
如ひとて太刀をしくく、
付江の雨降る屋の月あれや　董
師の喪よこもる山陰乃秋　良

喰だや百里届ー仏ゝ林を　山
掃除仕ゝ者をしらしけのまゝ　村
牧餌よ必の孫ゝる　良
花不言春深よ　董
人老也人又我を老とは　村
泥よ作をゝ亀のゝさよ　良

三

意ゝとして柳をのゝ船ゝ　儿董
離ゝとして又蝶を伴ゝ　蕪村
のとゝのよ菴ゝを住ゝて　嵐山
芥のゝゝさゝて實ゝる　摂良
よゝ程ゝ夜ハ走ゝりゝゝ　董
出ゝ選ひの沙汰の近ゝ　山

古歌秋の夕ぐれは八しま村
高きに登り物思ふ人の董
なるかと水の音に追れて良
きくとなきこゆる松風す村
風のとはなみて和歌の浦山
羽黒の鷹の磯へ高まる良
半弓の引ぬきに地へ董
宣禅の行俊寺とすれば山

垣成よ麦ひ[illegible]槍[illegible]村
枝のまばらに雲の白ゆ董
乗風の鏡[illegible]の良
ひとり香きく[illegible]村
かりの中まのおよの[illegible]山
名の惜しみ[illegible]良
鳥追ひまよる[illegible]の衣[illegible]董
良家の恩よ[illegible]村

什須の酒の歯のすゝ旅ゝき　良

尾花うもれの石ゝ次を打　董

山賊の月出る場をひろらん　村

ひつゝや露の虎吼るもの　良

やまと魂よりも我国は　董

旅の気を久しぶりに田植　村

米立作芋ゝ掘りの出て　良

老ゝ人の指ゝ切　董

淀鳥ねよ牛の病のもゝ引く　村

憂化退治の鳴の串ひ　良

曉乃小の江戸を開きゝ　董

ほのゝいろ女の眼弱　村

おの我のを紀尺男のあゝの逃　良

こゝまを染る春の山風　山

甚四

花散るゝ木のくれたよりかな　樗良

つゝのて卯木の垣の山吹　嵐山

摺鉢の獨活の芽ゝ和ら薫　村

既　満を教連歌一杯　北董

煤竹よ十三日の夜の山

塗をあるる門口の牛　良

はるばる旅の俳を連ゝ　董

去年の長者の歎くふく　村

雨をかるゝあるよ桔梗桔梗　良

垂具の皿よ紙引て山

ふる法師しゝ方中〳〵蜂よて　村

及びて去のよ雪の月の月　董

上加茂の水動くよ手ゝ山

萩ゝ中なる毘毘の竹　良

白綾の袂うちみしてゐんぎょう　董
ちくちく宇佐の神無月　村
きひしきや蓼穂のうへの雨　良
秋雨ふんと出る芦刀家　董
黍団子三日の糧とうんとうり　村
拍子を限り昼のとも次　良
鍼立のもも加へを思ふ衣　董
ぬれてちくちくと猫のものんおよ　村

ちくちくと唐の木綿よ風の音　良
新聖霊の給仕をし　董
能行屋秋の景子のゆのくて　村
月を惜の旅の宿の窓　良
世のうへの人の涙の風　董
頭おもくてとなるよ　村
銀の鉢よりもあをぎれて　良
長きしものく軒の雨　董

かくさらば成でも就の句を　村
田の刺髪ろくよやあらん　良
啼鳥我もまのあたり戎服　董
春の街を乱れ　阮孔　良
巷子ゆゑ柳は猶ほ緑の　村
主客の膳　もてなしろく　執筆

安永癸巳九月發行

郭文の勝具なれハ鬼貫の格を
さハくみしやもてなしよりの山
ぬみもう東庵のあにたち素あら
しのやりの春乃ゆ乃乃ゆ乃に
ぬるしをあらのいとはくれハ
やめて鈴夕春の扇子おもゆ
人ぬ花さらの俳をわくのは

しとかいたけ一帖よりて臥牀
のよりまもとおのひとちはとう
くまるもとに毒煙眼をとをき紙
材窗を蓋ひ荏苒として去れ
ぬ日にゆめとうたち蕭條と
ゆりくらす面を曉なきらされて
ふるもとの月をとらみ

て夜とう此上る時をるれ
ある人梅雨のんさくをほてこの
白つきをよとこひおこせ海を
れよけれいく澤淋漓として
雲外の一多腦をちまし言下に
一句を仕所謂狗尾をもて貂を続
たるをもを門下の二三子

廿三年四と申けゆまたにの
て三十六句さみちあいとよし花
櫻乃ほゝ附して則花鳥篇と
題号して我跡懈怠罪を謝せ
るもの也

壬寅皐月　　蕪村識

花櫻帖

浦里乃さゝ波寄の海苔の味　大石　士川
花をとゝ着ゐ宇八九日　浪花　雄山
ものの風さゝむ筏や大井河　延年
葛城や古寺の雨ちきれ　大和　何来
ゆきうに垣を仕舞ふ新屋　大石　佳則
雪ゆゑ山さて大寺三月　胡杵
あさ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ　宇治夕ハラ　野菊

さくらを服いとりて桜山桜　丹ミヤツ　東渚
嵐ふく海のくもりも消て山さくら　路景
我住家よりの景色二百　ヤマト　如水
さくらもいとと一樹乃さくら　大和　守明
僧寺に帰る月夜の桜ふる　西巴
花とに起て見れば白雪ちる春富　湖嵐
月入ぬ花よりのぼるさくら　十二ハ　うん
草砂と見て春の河　大石　士香

舟さして花さく月き細江ふる　我則
花と見て帰るしらぬ勝月　能二
米こうく水ふるる山さくら　佳棠
掛茶屋の杉ふる掛つる水　吾琴
花ふる海ていそふる逆るこてふ　青荷
花ふ神さふ名ふ日入行なり　古好
うたてきものさうやきの名ふ　女　古の
ゆく春乃遠巡とて逆さくら　金篁

きのふしてさて又男子
ちゑいさく紅葉雪入山櫻　春坡
掃部之丞　心頭
いろ〳〵入人見序もの山路うち　銀狮
遥さらに百入月のあけぼの乳　女　小いと
ちるとゑ〳〵ゑもひくもの櫻　爰鳥
ゑの香ゆさて〳〵に風入さる時　小菊
花さ寒て月に地とろ〳〵ゆ陰ゆ　松化
雪居

あさて〳〵に糸ゆと追ふ碑うち　是岩
鄙人入湯さ伊してさて小　舞岡
さて〳〵咲中ゆ携夫う飯りて　宮ツ　山呼
おりひはめ人伴ひてさて猪　維駒
先て牧さて〳〵ゑゑとゑし後　柳女
扨さて〳〵ゆ盤ちゑ君う多　ロキハ　桃葉
溜池ゆうこゑゑゑ　附鳳
舟出て〳〵入日乃あのさて〳〵　大石　曽西

移ろふ花の梦を世話外　東助

櫻移りの木うの木入一摘　さゝ女

舟出して吉山さくら見すてゝ　吞獅

面の白やむう白ある南良のも　徳弛

さのみちりしかちれし山桜　文皮

雪と咲雪と散りし山さくら　女　石松

花は葉に師宣を思ひ有月哉　十八　百樓

ものや大和河内の名所巡り　鶯汀

西山や花の時うつる日入あるる　大石　士巧

さくら伝説を尋ぬる山の作　菊十

ちりそゝ人語ふ入さくらの　蒙子

花の浪ちり上てきた南北　巴江

谷水へ入ぬ春さくら物　雷子

散うつの花見るうつ人うつ　五色

野子原やさくら過ぎの水　之兮

花りうの清ぬ沢の花の名あれ　尼寄　春洲

なびさまやひるやあり乃俗をと　仙臺　秋末
姥ゝまして乃れいさてハ咲はなく　イタミ　東風
白ゝの根をとわろしりうさて苗　眠柳
拔ゝ乃涙及ゝ花をと立て見ゆ　自笑
山おろし吹くちる葉や花の梢　三角
早飯の蓋をあらめやゆさらら　和流

誠乃さらゝ峡りゝ第二三編　兵コ　来屯

壱里乃花静さゝ年の貝　里由
良ゝ乃乃ゝ乃ゝ花のりと　清丈
さゝ乃ゝ乃ゝ神ゝ乃ゝ山ゝ乃ゝ　百池
日和ゝやと魚ゝ乃ゝさゝ乃ゝ　公遠
先きへ来て友ゝ乃ゝ乃ゝ花の山　文長
鶯戸出ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ戸をゝ乃ゝ　婆雪
遠ゝ晴て杉ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　存周
花ゝ乃ゝて飯ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ松の風　月居

夕くれの雨を離て天乃原　十二日　正名
いとゞも二のとこもとさらぬれ　通女
ちるハく花の外こハ櫻そゝり　梅亭
土地帝夕山信乃道さらぬ　高サユ　布舟
行神ハぬしてゝみを山さゝら　其答
ひゝ仁京さ寄めひゝ春山梅　魚赤
花さう寒くのゝしろく入日哉　田福
黄昏乃おりを野原やさ行人　林亭

さゝ〻実山る住とゝろく詩川　獣子
社京町乃門おゝ山さゝ社　里曉
猶りてあゝ仁ゝかやゝ花のもと　十二八　旧國
入月乃さゝよゝこきハ坤　幻住庵　臥央
花落花開花未醉
還愁千日五月家
千日乃酒要ハ誰リ花の蔭　道立
十字街
花さ酒汗して半のひゝ日外　蓼太

光台院

こともなき子の日の梅咲にけり　　暁臺

右文音乃二句

一休會裏にあそぶ輩

まれ正月しも奈良むかしき

たゝへくれの心あはれなる法

此の夜法とめ放参　經陀羅尼

きやるものなく

積楽田楽乃こゝろあゐ人ハ

こきのこちそのなし

俳諧の語のはつむ

さよくはあそびてはよみひとよ

此事ハてあそび語の語心に

仏門の御家にあつて味なる

飡子ハ歌ら心そとくのや

その一声をあはれにして

焦尾桐の音のをれに一曲の

手寄なき艶菊なり

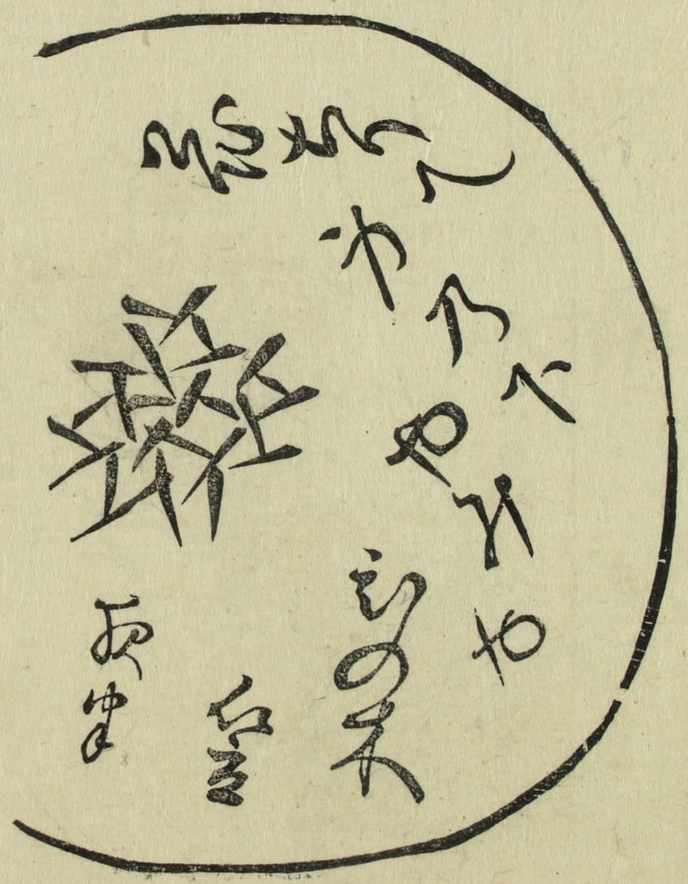
右の文ハ其角か焦尾琴にみえて

俳諧の一般をかたるものなし

おのれこゝろなし賤陋にして
寂寞をとりもとめすさらにとらえんとおもハ
壮麗に思を凝りもとむへきそ
さゝろまくれしの伏波将軍老當
益壮といへるこゝろのあまりにて
致を一にすへし吉市河柏筵か
中むら慶子なとハよくその理をと
りきハめてとしくる優伎のさま

やつるゝハまた旅館の家と云へし

さかえせんそハこの木笠とよしのて
旅子いろかし風流ハ志しハすなきのみ
あやてらさ世のわさくるしとそのなとハ
とやせかしこのわかつゝやあんなとかして
おかひそゝ家しとゝもえそうさすつゝ子ハ煙霞
花をまに宴幸賀をまもなをしハあやくをみあう
さはかれと今更人ハ我のみおろかなるやくとて
人をおもんおりそもはらさてかす



宗因

夢村
北華
百池
佳棠
金皇
湖柳
湖岩

むさきの入さむてまも芝のゆ水の
吳楚乃際ふるあらむ雲
皆ゝと枯もの寒さかろみて
飯をまさらぬ大イさを
あゝみて江湖所のるとさを
柳ハみとりにれいろぬ
所事乃新焉を燈入うゝ也
新ゆ表ゆ表ゆてる

田福
我則
之兮
是岩
雄三
正巴
維駒
吾琴

みこゝろに影沈る朧月
古乃林の表為る板
所密乃信濃を著物
表さゝ咲ハ泊てれゝ村
さみれさゝを壹ゝを蹟て
こしゆ後入蓋を踏刻ゝ
書て見てうゝ為の鳥を也らん
卜部乃家を作ぐるこゝ乃

月居
爰鳥
紫汨
銀樹
自矣
住棠
春坡
ル董

中あの形入物あやまてる小豆俵　雪居
そとはひやしとさぬつけむ　光而
ぬすてる味を師匠に投込て　蕪村
三蓮　船入鯛の皮に黄　、
ほらくとあらられの中に名の月　百池
こ此も芋を焚住てあ　魚赤
盃瓶へ肩の皮拭ふ宋　春坡
おとしい多いだんちく入取　松化

宗因もきの江戸ふの別て　蕪村
長雪信もよいちとうあ　宰町
俳あくさくの木兎のもと　巨立
たくらにやきときしの二多　吞卿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

奉納 浪華荒濱山 播陽刀田山 荒井白圭追福振句輯

山名春六
永田其道
兒玉烏栗
並井我席
西邑錦之
荒井湛露
西田如樂
花蘆田其誠
魚橋梅香
校瀬川蘭戶
藤　不二九
荒井楚雲

本評各上位五十吟
外座各卅、
花評各上位卅、
外座各廿、

題　順逆用

キイウ	ホハヽ	キヽウ	ワセミユ	
フカヲ	ワカム	ヤサキ	スヱワム	
ハナモ	ミチノ	カハナ	ノヱムア	
ヲヒサ	カキハ	ナチユ	サトスマ	
アカレ	ミヲワ	クレヨ	モキフセ	
キヤヱ	アワセ	マワカ	セウスク	
モアサ	カホヲ	トメタ	マカワア	
ハワ子	コテウ	ホタヨ	トユナワ	
カヽイ	ヒノワ	ケミユ	キフチハ	
カマヽ	キハミ	ヤムメ	カヱ	ニテ

武藤孫兵衛　朱紙墨之外入角
不引廉多義無尽　不残別出切摩渡

浦事引繕　連
西馬願主　播陽不藏
浪花可候

当限二月晦日迄寄句不拘
よろしく出来早速摂家へ
浦舟